

勤務医部会だより

「扶氏医戒之略」をご存じですか？



幹事 志水清和

(一宮市立市民病院 病院長)

日本近代医学の祖である緒方洪庵が書き記した「扶氏医戒之略」をご存じですか。多くの先生方はご存じだと思いますが、扶氏とはフーフェランド(ベルリン大学教授、1764-1836)のことで、その著「Enchiridion Medicum」のオランダ訳書を緒方洪庵が愛読し、20年ほどの年月をかけて和訳し、「扶氏経験遺訓」(全30巻)として出版しました。この「遺訓」の巻末には医者に対する戒めが記述されていますが、この部分を洪庵が12ヵ条に要約し、門人たちへの教えとしたのが「扶氏医戒之略」です。戒めのいくつかを紹介します。

- ①人のために生活して、自分のために生活しないことが医業の本当の姿である。
安楽に生活することを思わず、また名声や利益を顧みることなく、ただ自分を捨てて人を救うことのみを願うべきであろう。
- ②患者を診るときはただ患者を診るのであって、決して身分や金持、貧乏を診るのであってはならない。
- ③医学を勉強することは当然であるが、自分の言行にも注意して、患者に信頼されるようでないならない。
- ④自尊心が強く、しばしば診察することを拒むようでは最悪な医者と言わざるをえない。
- ⑤不治の病気であっても、その病苦を和らげ、その生命を保つようにすることは医師の務めである。それを放置して、顧みないことは人道に反する。たとえ救うことができなくても、患者を慰めることを仁術という。
- ⑥衆人の信用を得なければ何にもならない。ことに医者は、人の全生命をあずかり、個人の秘密さえも聞き、また最も恥ずかしいことなどを聞かねばならないことがある。
したがって、医師たるものは篤実温厚を旨として多言せず、むしろ沈黙を守るようにしなければな

らない。

- ⑦毎日、夜は昼間に診た病態について考察し、詳細に記録することを日課とすべきである。
- ⑧決して他の医師を批判してはならない。人の短所を言うのは聖人君子のすべきことではない。他人の過ちをあげることは小人のすることであり、一つの過ちをあげて批判することは自分自身の人格を損なうことになる。前にかかった医師の医療について尋ねられたときは、努めてその医療の良かったところを取り上げるべきである。

そもそも、当時(江戸時代)は医師資格などなく誰でも医者になれました。だからこそ、常に厳しく自身を律することを洪庵は門人たちに求めたのでしよう。今は医師になるためには医学部を卒業し医師国家試験に合格しなければなりません。しかし、それは医師になるための基本的な知識があることを認められたに過ぎません。技術がなく、人間的にも未熟であっても医師免許を持ってさえいれば医者です。何者でもない若いうちから「先生」と呼ばれ勘違いしてしまいます。私は医師になって、数年経過したときに初めて「扶氏医戒之略」を目にしました。その当時は医師になってある程度の経験を積んで、それなりに仕事にも慣れてきた時でした。慣れだけで何となく仕事をしている自分を反省することもなく、能力がついたと勘違いし、医師になった時の初心も薄れ、恥ずかしい勘違いから慢心していた時期であったかもしれません。まさに天狗になっていました。そんな時に、「扶氏医戒之略」を読んで、慢心している自分を恥じ、虚心坦懐の気持ちになれたのを思い出します。40年近く医者が続けてきましたが読み返すたびに、今でも自分の未熟さを痛感し、まさに「戒め」となっています。(この戒めが、150年以上前に書かれていることにも驚きます。)洪庵の門人たちへの戒めが、連綿と受け継がれ現在の私たちにまでつながり、多くの医者がこの戒めを胸に診療を続けていたことを考えると感慨深いものがあります。この中に医療の本質があり、本質は不変であるということだと思えます。医者は医者であるために、常に自身を律することが求められています。多くの先生に、改めて、医療について考えていただける機会になると思いますので、是非ご一読いただければと思います。できれば、若い先生にこそ、多くのことを感じてもらえればと思いますので、先生方からも勧めていただければ幸いです。宜しく申し上げます。